

特別企画展

阿波人形浄瑠璃

興行のにぎわい

伝統に輝く人形浄瑠璃の華！
阿波源之丞発表会



絵本大坊記十段目尼崎之段 宮崎文庫 豊後市
傾城阿波源之丞讃岐歌之段 深見忠雄 高松市
金比羅利生記忘度寺之段 下澤良典 香川県
賤岳之段目湖水庵室之段 大藤可美 高松市
大和寺指折忠兵衛新白村之段 直江社龍 高松市
谷城軍記三鐘屋茶屋之段 新見五福 豊後市
傾城阿波源之丞讃岐歌之段 大津雄輝 豊後市
名筆阿波源之丞讃岐歌之段 豊後市

3月18日(日)

午前10時・午後4時
2回公演

会員券 300円

前売所 産経スレイガイド

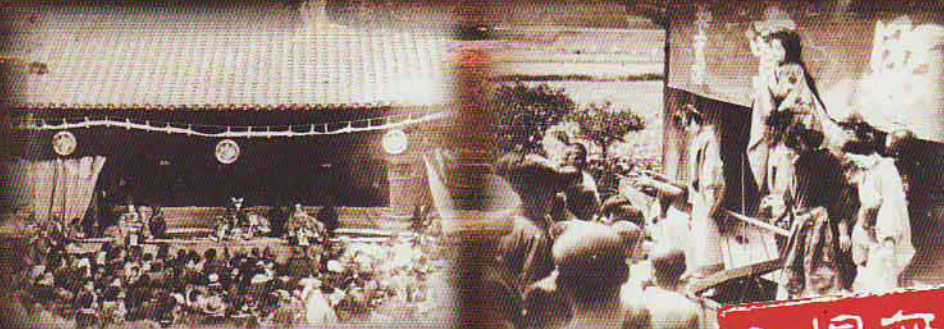
好評発売中/先入れぬ中にお早くお求め下さい

産経書館



ハウスカレ

人形浄瑠璃興行ポスター(個人蔵)



農村舞台と箱廻し(久米家資料)

入場無料

■展示期間 平成19年10月23日(火)
~平成20年1月20日(日)

■開館時間 午前9時30分~午後5時

■展示場所 徳島県立文書館 展示室

〈展示解説〉文書館職員等による展示資料の解説

■日時 平成19年11月1日(木)、12月16日(日) 午後1:30~3:30

■場所 徳島県立文書館 講座室・展示室

〔共催展〕

「福を運んだ木偶たち

~阿波木偶「三番叟まわし」「えびすまわし」~

■日 時 平成19年10月30日(火)

~11月11日(日)【休館日】11月5日(月)

■開館時間 午前9:30~午後5:00

■場 所 徳島県立文書館 講座室

〈主催〉芝原生活文化研究所・阿波木偶廻しを復活する会・徳島県立文書館

「かどや日記」にみる城下町興行のにぎわい

眉山山麓の佐古から寺町をへて二軒屋へと続く一帯は、江戸の両国・浅草界隈を小型にしたような、江戸時代後半の城下町徳島における興行の一大中心地でした。名西郡高原村（現石井町）に住んでいた元木宇三郎が書き残した「かどや日記」をもとに、その様子をちよつとのぞいてみましょう。

たとえば、文政十年（一八二七）十一月には、当時日本中に空前のフィーバーを巻き起こしていたラクダが寺町の慈船寺に登場。翌年の八月には、佐古大谷石口で横綱になつて間もない阿武松が土俵入り。時代は少し下がって弘化四年（一八四七）八月には、二軒屋潮見寺で、やがて幕末

最大の人気軽業師となり、米国にまで進出した早竹虎吉の興行が大当たり。この他にも、ギヤマンや貝などの細工見世物やおどけ軍書講釈などの各種芸能、さらには徳島藩が禁止していた歌舞伎まで、「軽口」（芸能のひとつ）だと強弁して上演されていました。

「かどや日記」には文化八（一八一）年から安政四（一八五七）年までの約半世紀の間に、百回ほどの城下での興行に関する記録がありますが、その六割が浄瑠璃興行でした。上村源之丞や市村六之丞などの淡路人形座の他に、素人浄瑠璃や子供浄瑠璃などの興行が毎年のように人々を楽しませていました。

「二軒家口で上村源之丞座

の御祝儀興行が三月上旬から四月末まで行われた。太夫は錦太夫、三味線は伝八、追抱は竹本大隅太夫に三味線清七。私は三月六日に見物した。『和田合戦』三段目を錦太夫が『三日月太平記』三段目を大隅太夫を勤め、錦

太夫が好評であつた。客の入りもそれなりでそこそこの儲けになつたそうだ。」などと、好奇心旺盛な宇三郎は個々の興行についての“評判”を書き記しています。

お寺や神社の境内や空き地などに作られた小屋の木戸を歩くぐれば、そこには夢の世界が待っていたことでしょう。



口上を述べる座本中村久太夫（酒井家文書）

ごあいさつ

人形浄瑠璃は、浄瑠璃（太夫）と三味線（三味線弾き）と操り人形（人形遣い）が一体となった舞台芸術で、ユネスコ世界無形文化遺産として登録されました。阿波人形浄瑠璃は徳島県人にとっては、演目の中心となる「さわり」を誰もが語ることが出来るといわれるほど愛されてきた郷土芸能です。

阿波人形浄瑠璃に関しては平成十六年度の特別企画展として「歴史資料にみる阿波人形浄瑠璃」を行いました。この展示により阿波人形浄瑠璃の実証的研究の端緒となり阿波人形浄瑠璃の保存振興発展につなげたいとの思いでありました。今回の特別企画展は「阿波人形浄瑠璃～興行のにぎわい～」と題して人形浄瑠璃がどのように興行されてきたかに焦点を当て、興行をする人びとやそれを楽しむ人びとの思いを読み取っていただけたらと思います。

興行に至るまでの許可申請のやりとり。舞台装置や小屋掛け、人形などの道具類の運搬、宣伝広告など興行を行うための諸準備。人形役者の手配や宿泊、当日の上演の様子。興行の収支まで、大切に保存されてきた古文書や絵画・写真・ポスターなどから如実に読み取ることが出来ます。さらに日々の厳しい農作業や労働の間にしほの楽しみとして、また、神々への豊作・大漁の祈願やお礼として上演された阿波人形浄瑠璃への思いをうかがい知ることが出来ます。阿波人形浄瑠璃は街角や村の広場で上演し、芝居が終わると次の場所へと移動する「大道芸」としても行われました。この「箱廻し」

は身近に人形浄瑠璃に触れられる娯楽として親しまれ、農山村にも人形芝居を普及させて行きました。

このような藩政期から現在まで行われてきた阿波人形浄瑠璃の興行も明治中期を全盛期として大正期以降「活動写真」の普及、戦後のテレビの普及によって次第に少なくなっていました。当館としては、阿波人形浄瑠璃の展示をさまざまな面から継続して企画し、その振興発展に寄与したいと考えています。

なお期間中、「福を運んだ木偶たち～阿波木偶『三番叟まわし』『えびすまわし』」と題して芝原生活文化研究所・阿波木偶箱廻しを復活する会との共催展を行います。正月や祭りで人形を使った一年の豊作や大漁を言祝ぐ「三番叟まわし」「えびすまわし」が県内をはじめ愛媛・香川など各地の家々を訪れる門付け芸として行われてきました。昭和三十年代以降廃業の進む中、この復活と伝承に取り組んでいる活動を紹介いたします。

この展示の開催にあたり、芝原生活文化研究所・阿波木偶箱廻しを復活する会・鳴門教育大学附属図書館・徳島県立博物館・深見小巴龍氏・吉成正一氏をはじめ数多くの方々のご協力をいただきました。末尾ながらお礼申し上げます。

平成十九年十月二十三日

徳島県立文書館長 計盛 眞一朗

阿波人形浄瑠璃 ～興行のにぎわい～

間の予定で興行を行うことが許可されました。

打ち切られた興行

興行開始予定日からしばらくして、藩の役人は不審に思うことがあったのか、きまりに違反することはしていないだろうな、という念押し文



現在の福満寺

書を送ってきました。これに対し寺と村人は、けして疑わしいことはしていないと答え、さらに興行を中止されてはたまらないと思っただのか、雨天が続いてまだ初日もあけておらず、浄瑠璃を語る子どもも雇っているのに困っていると付け加えています。しかし、雨続きで日が延びていくうちに、役人が何か疑わしいことでも耳にしたのか、興行はとうとう中止させられてしまいました。

寺と村人が考えた次の手は…？

子どもも浄瑠璃が中止され、お寺の修理費用が集まらないどころか、雨続きで興行自体

が赤字に終わってしまいました。そこで寺と村人が考えた次の手は、村民の八兵衛という人に「おどけ軍書講釈」（軍記物を面白おかしく語って聞かせるもの）をさせるというものでした。この願いを出したところ、役人からまた問いただしがきます

どけ軍書講釈」に許可はおりたのか。結末は残念ながら史料が無くて分かりませんが、興行をめぐるこうしたやりとりからは、何とか興行を開催しようとする村人の思いが伝わってきます。

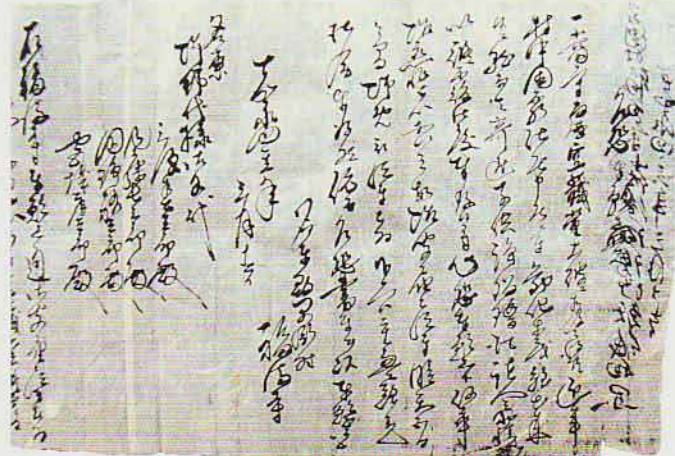
が、寺と村人はひたすらお寺の修理のためであって疑わしいことはない、八兵衛は以前から雇われて色々な所へ講釈に出かけており、人柄も良い者であると訴えています。この「お



人形浄瑠璃の舞台絵（酒井家文書）

村での人形浄瑠璃興行

江戸時代、農作業に追われる村の生活の中で、賑やかな人形浄瑠璃の興行は村人にとってどんなに楽しみだったでしょう。しかし、藩は風紀を乱すとして興行に対する取締りを厳しくしていました。村で興行を行うには郡役所に届け出が必要で、興行の許可をもらうにもいくつか守らなければいけないきまりがありました。ここでは名東郡早測村（現徳島市国府町）に残された後藤家文書から、そうした藩の立場と、自分たちの村で何とか興行を開催しようとする村人とのやりとりを紹介します。



「早測村福満寺 子ども浄瑠璃興行願い」(部分)
(鳴門教育大学附属図書館蔵 後藤家文書)

子ども浄瑠璃興行願い

興行の許可をもらうまで

嘉永四（一八五二）年三月、

名東郡早測村の福満寺と村役人から子ども浄瑠璃の興行をしたいという届けが出されました。これは福満寺の虚空蔵堂の修理のために子ども浄瑠璃の興行をしてその収入を修

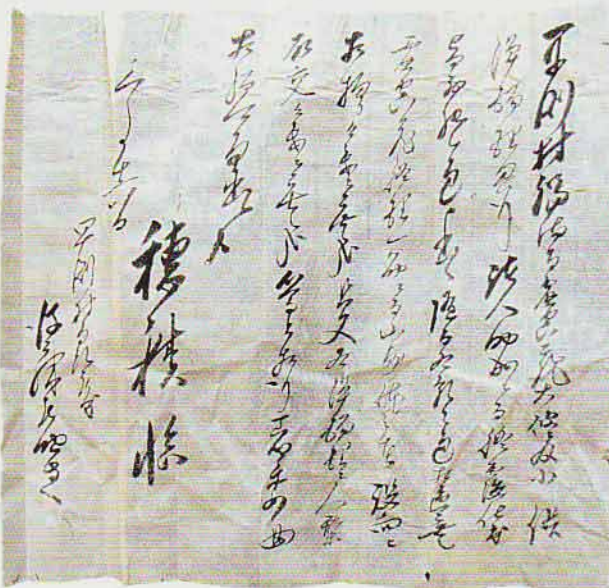
理費用に当てたいというものでした。

これに対し、藩の役人から問いただしの文書が来しました。

それはこの興行が本当にお寺の修理のためなのか、たちの悪い興行師が関わっていないか、ということ詰問したものでした。当時、何かにつけて興行を行い儲けようとする者がいたようで、興行は神社やお寺への寄進のためなどの名目が必要でした。また、人

形浄瑠璃の興行に關する文書には「かねてから禁止されている歌舞伎をするつもりではないだろうな」という一文がよく出てきます。このことから当時の阿波では歌舞伎の興行が禁止されていたことがわかりま

す。さらに早測村の場合では、子ども浄瑠璃という申請でしたが、これは子どもが浄瑠璃を語るだけで人形は使わないのかなど問い合わせています。これらは、何かと派手になりがちな興行に警戒の目を向ける藩の姿勢を表しています。



興行願いに対する役人からの問い合わせ文書(後藤家文書)

帳簿からみた明治の興行

上村源之丞座は淡路人形浄瑠璃の元祖としても知られ、日本全国へ巡業に回り、徳島でも村々を回っていました。その源之丞座が、板野郡三俣村（現鳴門市）に明治一〇（一八九二）年一月一八日・一九日の二日間に行つた興行と、勝浦郡生実村（現上勝町）で明治二四（一八九二）年二月一八日に行つた興行の実際の帳簿からその様子を見てみましょう。

三俣村では、二日間の興行に約四六円かかりました。その内訳は、源之丞座への花代（出演料）に三〇円、蠟燭・油などの灯明代に六円、飲食代に三円、運送費に一円二〇銭、残りは人件費や雑費でした。公演は夜にかけて行われ、灯明代が高いようです。このお金は、村の地神祭で行われたので、村の人々九〇人が持つ土地の広さに合わせて割り振っています（高割）。中にはひとりで一〇円も払った人がいました。

生実村では、一日の興行に約二五円かかっています。内訳は、源之丞座への出演料に一九円、灯明代に七〇銭、飲食費に約四円、残りは雑費でした。灯明には、蠟燭だけでなく石油が使われ安くなっているようです。このお金は、周辺の村々から来た人を含め一四一人の観覧料が充てられましたが、四円ほど赤字でした。山村ならでは

すが、人形など荷物の運送は、前の巡業

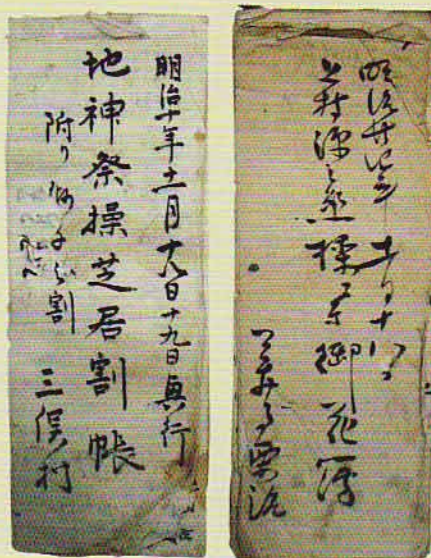
地である隣の野尻村から生実まで延べ三九人の村人が携わっています。また次の

田野々村への運送の時も八人が助けに出ています。村人達が興行を楽しみに荷物を

を背負って山坂を上り下りする様子が目に浮かびます。また、人形役者達三三人

は村人一五軒の家に分宿しています。こうした役者の分宿も村人の楽しみだった

のでしょう。



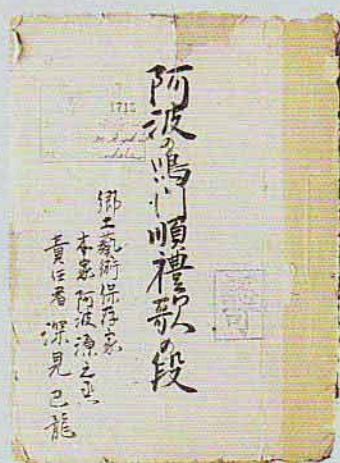
人形浄瑠璃興行の帳簿

戦後の人形浄瑠璃

昭和二〇（一九四五）年に戦争が終わって、また人形浄瑠璃を楽しめる時代がやってきました。ただ、日本を占領した連合国軍総司令部（GHQ）は軍国主義や封建主義につながりそうな芸術には神経をとがらせており、人形浄瑠璃の上演に際して台本の検閲が行われていました。

徳島県では、昭和二二（一九四六）年に「阿波人形浄瑠璃振興会」が結成されています。昭和二二（一九四七）年七月には、戦災で焼け残った徳島駅前内町小学校講堂を会場にして「第一回阿波人形浄瑠璃夏季大会」が開催されました。

しかし、昭和三〇年代になると、テレビの急速な普及もあって民衆の娯楽としての人形浄瑠璃は急速に姿を消していき



GHQの興行許可のおりた
浄瑠璃台本（個人蔵）

福を運んだ三番叟まわし

「正月は、人形まわしが運んでくるものと、幼い頃の私は信じこんでいた。私の故郷の阿波の徳島では、正月元旦の朝早く、門づけに人形まわしが軒毎を訪れる慣わしがあった。…」瀬戸内晴美（寂聴）が、小説『恋川』の冒頭で昭和初期の徳島の正月風景を描いている。木偶操りによる「三番叟まわし」は、徳島県をはじめ香川県愛媛県の正月儀礼として藩政期から長く定着してきた門付けの祝福芸である。

二つの箱（木偶櫃）を振り分けにして天秤棒で担ぎ、得意先の家々を回壇する。前の箱には、千歳、翁、三番叟とエビスの木偶を入れ、後ろの箱には神札や御幣の他、祝儀の金と米や餅などが入れられ

る。通常、木偶を操る芸人と鼓打ちの二人がひと組となつて、元旦から春先まで稼働した。また、秋のえびす講に村々を廻ったといわれている。回壇先は、すべて日時や順番を決めてお

り、食事の接待を受ける家や宿泊する家も決まっていた。「三番叟まわし」を迎える家人は、三番叟で厄を祓い清められ、エビスから福を受け取り、無病息災、家

内安全、五穀豊穰、商売繁昌を予祝され正月を迎えた。「三番叟まわし」が、徳島県の「欽初め」や愛媛県での「ノバセワラ」などの農業神事を行った記録を各地の町村誌で確認できる。その他、普請の際の地鎮祭を行うなど、市民の暮らしに根ざした民俗文化

（芸能）であった。現在、阿波木偶箱廻しを復活する会が、芸人に弟子入りして技術と得意先を受け継ぎ、二〇〇二年から毎年、約八〇〇軒を門付けしている。

（芝原生活文化研究所 辻本一英）



福を運ぶ三番叟まわし

展示資料一覧

No.	表 題	年 代	備 考
興行のにぎわい			
1	かどや日記		元木家文書
2	座本中村久太夫	文政9(1826)年	カ100181
3	座本蛭子屋忠太夫	明治11(1878)年	カ100179
4	座本蛭子屋忠太夫	明治12(1879)年	カ100196
5	座上上埜源左衛門	明治20(1887)年	カ100201
箱廻しの世界			
6	箱廻し道具一式(絵本太功記)		芝原生活文化研究所 阿波木偶箱廻しを復活する会
7	三番叟まわし道具一式		芝原生活文化研究所 阿波木偶箱廻しを復活する会
8	えびす木偶1体		芝原生活文化研究所 阿波木偶箱廻しを復活する会
9	護符神札各種・御幣3種・版木3枚		芝原生活文化研究所 阿波木偶箱廻しを復活する会
福満寺興行一件			
10	早瀬村福満寺浄瑠璃再応行着添書ひかへ	嘉永4(1851)年	鳴門教育大学附属図書館 所蔵後藤家文書
11	(早瀬村福満寺子ども浄瑠璃願書)	嘉永4(1851)年	鳴門教育大学附属図書館 所蔵後藤家文書
12	(早瀬村福満寺子ども浄瑠璃願紙面)	嘉永4(1851)年	鳴門教育大学附属図書館 所蔵後藤家文書
人形浄瑠璃興行の帳簿			
13	地神祭操芝居割帳	明治10(1877)年	ト104849
14	上村源之丞操二付御花簿	明治24(1891)年	ミ702161
明治・大正・昭和の浄瑠璃興行			
15	無木戸銭素人操人形吉日興行御届	明治20(1887)年	カン00396
16	一日限素人々形操興行御届	明治28(1895)年	ミ702465
17	義太夫調査書(徳島県教育会)	大正2(1913)年	徳島県立博物館
18	人形座寄書(上村源之丞座・市村六之丞座)	昭和17(1942)年	徳島県立博物館
19	人形座町廻り図(林鼓浪画)		徳島県立博物館
20	人形芝居図(林鼓浪画)		徳島県立博物館
21	人形浄瑠璃興行ポスター(元祖本家源之丞)		徳島県立博物館
22	人形浄瑠璃興行ポスター(阿波人形浄瑠璃夏季大会)	昭和31(1956)年	徳島県立博物館
23	人形浄瑠璃興行ポスター(阿波源之丞座・大阪公演)	昭和31(1956)年	個人蔵
24	人形芝居映画演劇検閲書類	昭和23(1948)年	徳島県立博物館
25	人形芝居映画演劇検閲書類(許可済み台本)	昭和23(1948)年	個人蔵

※資料保存のため展示品の一部を替え変えることがあります。



林鼓浪画「人形芝居図」(徳島県立博物館蔵)

特別企画展
阿波人形浄瑠璃 ― 興行のにぎわい ―

平成十九年十月二十三日発行

編集・発行 徳島県立文書館
〒770-8770 徳島市八万町向寺山
電話 〇八八(六六八)三七〇〇

印刷 ナカガワ・アド(株)
〒770-8770 徳島市八万町向寺山
電話 〇八八(三三三)二六四三